

小学校助教諭の体力・技能と教科体育への意識 (第4報)

—— 器械運動・ダンスの領域を中心として ——

森 清・阿部正臣・梶原洋子・メ木一郎

The Physical Fitness, Skill and Consciousness of Physical Education in Elementary School Teachers (4)

—— A study of the field of apparatus and dancing ——

Kiyoshi Mori, Masaomi Abe, Yoko Kajiwara, Ichiro Shimeki

序

本研究の出発点は、「初等教育の教員養成課程における体育科教育や体育科教材研究の内容は如何にあるべきか」という点にあった。

この問題点を具体的に検討していく過程で、将来一教師として十分に体育指導が行えるような力を身につけさせるには、限られた授業時数の枠内で「必要最低限、何を、どの程度教えたらよいか」、また「必要最低限、指導の中核となるべき技能や指導力をどの程度身につけさせたらよいか」などが提示された。

これらの問題点を解明する手掛りとして、小学校助教諭（小学校教諭免許を有していないが、「小学校教員」として採用されている者）を対象に、体力・技能の実態、教科体育に対する意識の実態、体力・技能の有無と教科体育に対する意識との関係について過去5年間にわたって調査分析してきた。

既に、拙稿第1報および第2報では、体力・技能と教科体育に対する意識について、第3報では、取得免許別の教科体育に対する意識を中心として報告し、次のような結果を得ている。①技能では、男子教員よりも女子教員の技能（器械運動の跳び箱運動・鉄棒運動、

ボール運動のインステップキックなど）の低いこと、②教科体育の意識では、体育の好き・嫌いや指導の難易性に性差がみられ、女子教員の意識の低いこと。運動領域別指導の難易性において、できる・できないが明確にあらわれるような水泳や器械運動、そしてダンスを指導しにくい領域とし、水泳・器械運動では技能に対する自信の有無や危険に対する認識が指導のしやすさ・しにくさに深く関連し、体操・ダンスでは運動領域に対する基礎的知識や指導に関する研究不足が指導のしにくさに関連していること、③体力・技能と教科体育に対する意識との関係では、体力・技能の有無が教科体育の意識の高さ・低さ、授業や教科外の行動の積極性・消極性に関係のあること。運動部経験の有無が技能の有無に関係し、教科体育の意識と強い関係のあること。また、領域別技能の有無が当該運動領域の指導のしやすさ・しにくさとその理由に結びついていること。④取得免許別の教科体育に対する意識では、体育の指導の難易性とその理由において保健体育免許取得者と他教科免許取得者との間に顕著な差異がみられたこと。他教科免許取得者同様、保健体育免許取得者においても、水泳およびダンスは指導し

にくい領域であることなどの結果を得ている。

本研究、第4報においては第1報および第2報に引き続き、技能の有無と教科体育に対する意識との関係について、できる・できないが明確にあらわれる器械運動を取り上げ、その問題の解明にあたりたい。また、運動領域の中でも特に指導しにくい領域とされるダンスについて、指導の実態および指導に対する意識を明らかにし、ダンス指導の現状を把握することにより、教科体育のカリキュラム検討のための基礎資料を得ようとするものである。

研究方法

1. 対象者

図-1 53年度対象者の年齢構成

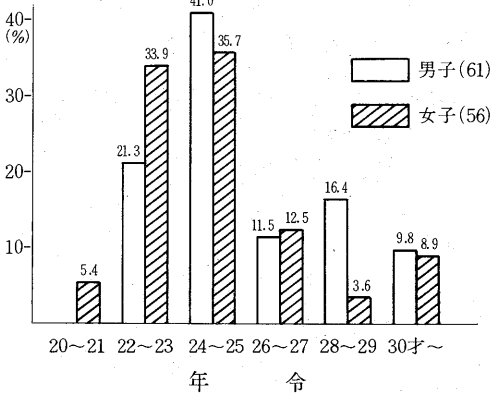
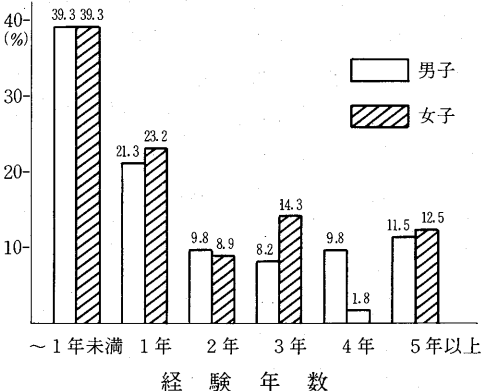


図-2 53年度対象者の教職経験



埼玉県教育委員会から本学に委嘱された小学校助教諭を対象とした。

昭和53年度 250名、有効数117名 (男子61名、女子56名)

昭和55年度 280名、有効数207名 (男子114名、女子93名)

対象者の内訳は図-1、図-2、図-3、図-4に示すとおりである。

図-3 55年度対象者の年齢構成

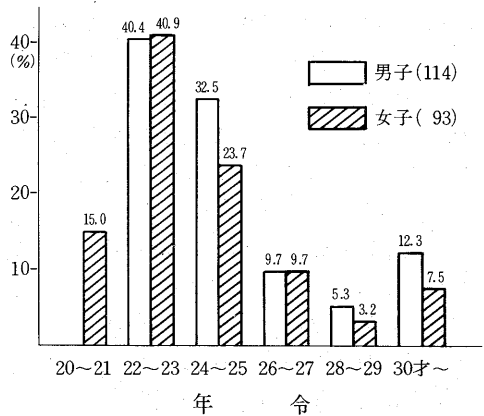
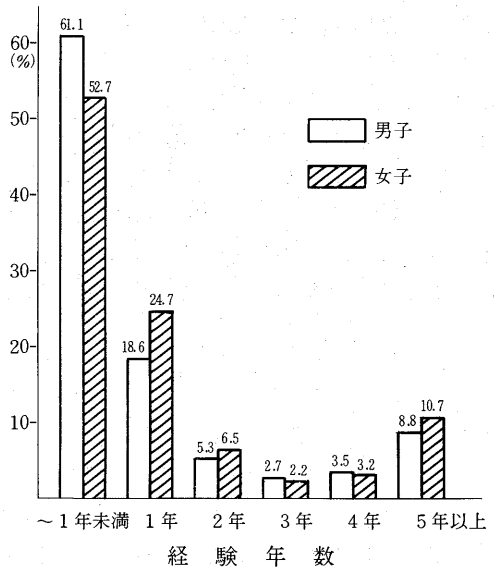


図-4 55年度対象者の教職経験



2. 調査期間

調査期間 昭和54年2月, 昭和55年7月

3. 調査項目

○器械運動の技能

①鉄棒運動(さか上がり一腕立て前転・前回りおり) ②マット運動(前転一開脚前転一前転) ③跳び箱運動(腕立て開脚跳び 男子5段105cm, 女子4段90cm)を実施した。

測定の要領, 評価基準は下記のとおりである。

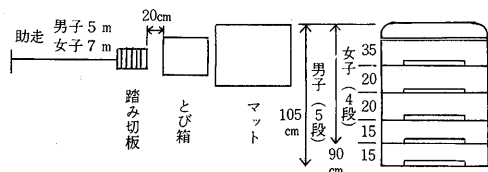
①鉄棒運動(さか上がり一腕立て前転・前回りおり); 胸の高さで順手でを行い, 鉄棒の真下の白線から片足および両足踏み切りで実施した。連続わざが無理なくスムーズにできるもの「できる」, できることはできるが, ぎこちなくスムーズでないもの「不完全」, 全くできないもの「できない」とした。

②マット運動(前転一開脚前転一前転); 手のつき方, 頭の入れ方などにおいて無理なくスムーズに連続して行えるもの「できる」, 手のつき方, 頭の入れ方が悪く, スムーズに連続して行えないもの「不完全」, 片方の腕に体重がかかり大きく曲がったり, 起き上がれないもの「できない」とした。

③跳び箱運動(腕立て開脚跳び); 図-5に示したとおりに実施し, 無理なくスムーズに跳び越せるもの「できる」, ぎこちなく無理な跳び越しのもの「不完全」, 跳び越せない, または馬のりになるもの「できない」とした。

なお, 各測定直後に質問紙法により, 各測定に対する自己評価, さらに, これらの指導にあたっての指導方法についても調査した。

図 5



○ダンスの指導の実態および指導に対する意識

①指導の実態; ダンス指導の有無, ダンス指

導の重点のおき方, ダンスの授業時数, ダンスの他教科・他運動領域の振りかえ, 指導力をつける方策, 取り扱っている内容。

②指導に対する意識; ダンス指導の難易性, ダンスの内容別の指導のしやすい理由・しにくい理由。

③その他; フォークダンスの覚えた時期, フォークダンスの各ステップのできる程度などについて, 質問紙法による調査を実施した。

4. 結果と集計処理

①技能は各項目毎に男女別, 年令別, 技能の優劣別に人数, パーセンテージを算出した。

②意識調査は各項目毎に男女別, 教職経験別, 担当学年別, 取得免許別, 学歴別などを算出した。

上記の集計処理には電子計算機 TOSBAC-5600およびシャープMZ-80Cを使用した。

結果と考察

1. 器械運動の技能とその指導に対する意識

(1) 技能の実態

1) 技能における性差

第1報および第2報では, 小学校助教諭が指導上あるいは示範上, この程度の技能を持っていないと困るであろうという観点から, 小学校教科体育の運動6領域中, できる・できないが明確にあらわれるような器械運動, 陸上運動, そしてボール運動の3領域を選定し, 主として客観的立場から評価できる測定項目を実施し, その技能の実態を報告した。これらの調査において, 女子教員の技能が男子教員よりも低く, 特に器械運動の跳び箱運動(腕立開脚跳び, 腕立て閉脚跳び), 鉄棒運動(さか上がり)やボール運動のインステップキックなどに顕著な差がみられたことを指摘した。

今回は顕著な性差がみられた器械運動を特に取り上げ, これまでが個々の種目の測定であったのに対し, 鉄棒運動およびマット運動では他の種目と結合させ, 一連の連続的な動

き、つまり連続わざびに発展させて測定を実施した。測定項目の選定にあたっては新・旧の文部省小学校指導書体育編を参考に、小学校5年生程度の技能内容とし、技能の難易度を高めた。

表-1、表-2が各技能の結果である。

表-1 男子の技能 (%)

技能	評価	年齢	全体	22~23	24~25	26~27	28~29	30以上
		人員	61	13	25	7	10	6
鉄棒運動	さか上がり	できる	31.1	53.8	32.0	43.9	10.0	0
	腕立て前転・前回りおり	不完全	16.4	15.4	12.0	0	40.0	16.7
		できない	52.5	30.8	56.0	56.0	50.0	83.3
マット運動	前転	できる	32.8	69.2	20.0	28.6	20.0	33.3
	開脚前転	不完全	52.4	23.1	64.0	71.4	40.0	66.7
		できない	14.8	7.7	16.0	0	40.0	0
跳び箱運動	腕立て開脚跳び	できる	95.1	100.0	92.0	100.0	100.0	83.3
		不完全	1.6	0	4.0	0	0	0
		できない	3.3	0	4.0	0	0	16.7

表-2 女子の技能 (%)

技能	評価	年齢	全体	20~21	22~23	24~25	26~27	28~29	30以上
		人員	56	3	19	20	7	2	5
鉄棒運動	さか上がり	できる	16.1	0	26.3	0	57.1	0	0
	腕立て前転・前回りおり	不完全	8.9	0	15.8	10.0	0	0	0
		できない	75.0	100.0	57.9	90.0	42.9	100.0	100.0
マット運動	前転	できる	25.0	33.3	31.6	20.0	14.3	0	0
	開脚前転	不完全	44.6	0	52.6	35.0	57.1	50.0	60.0
		できない	30.4	66.7	15.8	45.0	28.6	50.0	40.0
跳び箱運動	腕立て開脚跳び	できる	67.9	66.7	73.7	60.0	85.7	0	80.0
		不完全	10.7	33.3	15.8	10.0	0	0	0
		できない	21.4	0	10.5	30.0	14.3	100.0	20.0

〔鉄棒運動〕さか上がり一腕立て前転・前回りおり；「できない」は男子52.5%，女子75.0%と女子の方が技能が低い。しかし、男女共「できない」に「不完全」も含めて考えると、技能の未習得率は極めて高く、男子68.9%，女子83.9%と教員全体の7~8割にも達し、技能の顕著に低いことが認められた。年齢別では、男子は加齢に伴い「できない」の比率が高くなる傾向を示した。

〔マット運動〕前転一開脚前転一前転；「できない」は男子14.8%，女子30.4%，「不完全」は男子52.4%，女子44.6%であり、「できない」に「不完全」も含めて考えると、男子67.2%，女子75.0%と教員全体の7割にも達し、さきの鉄棒運動同様、技能の未習得

率極めて高く、技能の顕著に低いことが認められた。年齢別では、「できない」に「不完全」を含めて考えると、女子は加齢に伴いその比率が高くなる傾向を示した。

〔跳び箱運動〕腕立て開脚跳び；男子5段(105cm)、女子4段(90cm)の高さを「できない」は男子3.3%，女子21.4%と女子の方が技能が低い。「できない」に「不完全」も含めて考えると、男子4.9%とほとんどの者がこの技能を習得しているのに対し、女子32.1%と3割以上の者が未習得の状況にある。年齢別では、とりたてた傾向はみられなかった。

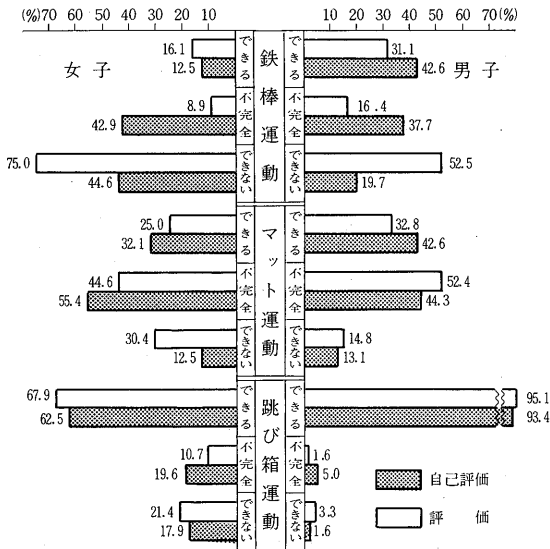
以上、器械運動の技能の実態では、全体的にみて、女子の技能の低いことが認められたが、男女共特に鉄棒運動およびマット運動における連続わざびに未習得の状況が明確であり、技能の顕著に低いことが認められた。本調査では、図-1からわかるように、助教諭の年齢は20~25才が70%を占めるという大学出たての比較的若い年齢層の教員であるにも拘らず、連続わざびとしての技能が顕著に低いことは、おそらく個々の技術を確実に習得していないことも起因すると思われるが、個々の技術を習得したらそれらを結合し、一連の連続的な動きに発展させていくという連続わざびとしての運動経験の浅いことなどにもよると思われる。

2) 技能における評価の差異

表-1および表-2に示した技能の測定にあたっては、各助教諭について各技能実施直後に質問紙法により、本人自身の各技能に対する自己評価を行わせた。図-6がその結果であるが、本研究者による評価と助教諭自身の自己評価を比較し、その差異を示してみた。

男女別に、全体的にみると男女共跳び箱運動(腕立て開脚跳び)を除いた鉄棒運動(さか上がり一腕立て前転・前回りおり)、マット運動(前転一開脚前転一前転)において、我々の行った評価よりも助教諭の自己評価の方が高く、評価の比率に顕著な差異がみられ、

図一六 技能における評価と自己評価



鉄棒運動にその傾向が強くみられた。すなわち、鉄棒運動では「できる」は評価よりも自己評価の方がその比率が高く、男子は31.1%に対し42.6%、女子は16.1%に対し12.5%である。「できない」は「できる」とは反対に自己評価よりも評価の方が比率が高く、男子は19.7%に対し52.5%、女子は44.6%に対し75.0%である。マット運動でも鉄棒運動ほど顕著ではないが同様の結果である。このように、「できる」は評価よりも自己評価が、「できない」は自己評価よりも評価の比率が高いことは、いわゆる助教諭の技能に対する評価基準が甘いために、評価全体にギャップが生じたものなのか。また、今回の鉄棒運動・マット運動では連続わざとして評価されるべきものが、助教諭自身の連続わざとしての認識不足のために、単一の技能ができれば「できる」あるいは「不完全」と自己評価した結果、評価全体にギャップが生じたものなのか、この点について今後検討すべきと思われる。

跳び箱運動では、鉄棒運動やマット運動のように評価と自己評価の間に顕著な差異はみられないが、若干の差異がみられるのは「できる」と「不完全」の間での変動にすぎないの

で、ほぼ我々の評価と助教諭の自己評価が一致したとみてよいであろう。跳び箱運動では、運動の構造上連続わざに発展でき得ないことや、運動の特性から「できる・できない」すなわち、「跳べる・跳べない」の技能の有無が明確であるので、評価における差異をほとんど生じさせないという結果につながったものと思われる。

(2) 器械運動の指導に対する意識

器械運動は、助教諭の3割近くの者が指導に苦慮し、ダンス（表現運動）、水泳に次いで指導しにくい領域であること、そしてその指導の難易性には、技能に対する自信の有無や危険に対する認識が結びついていることを本研究第1報～第3報にて報告した。

第4報では、器械運動に対する意識について、さらに一歩進めて、器械運動における示範の程度、器械運動の技能内容別指導の難易性およびその指導方法についても調査した。

器械運動に対する意識調査は、鉄棒運動（さか上がり一腕立て前転・前回りおり）、マット運動（前転一開脚前転一前転）、跳び箱運動（腕立て開脚跳び）の各技能実施直後に質問紙法により、各助教諭について本人自身の各技能に対する自己評価とあわせて実施したものである。

ここでは、器械運動の技能内容別指導方法について中心に考察し、その他の調査項目については後述の「器械運動の技能の有無からみた意識」の項で取り上げ考察したい。

各技能内容の指導方法についての質問は、主として技能の示範の行い方を含んだ質問であるが、これは現在および近い将来において、助教諭が小学校5年生程度の器械運動の各技能の指導にあたるとしたら、どのような取り組み方をするのかを把握するためである。そして助教諭各自に自己の技能程度を認識させた直後に実施したのは助教諭の本音に近い意識を探るためである。

表一三および表一四は各技能内容別の指導

方法についての結果である。

今回、男女別・年令別にも調査分析したが、標本が少数であり、年令別比較は困難と思われるので、ここでは男女別に全体的傾向をみていきたい。図-7は、表-3および表-4をわかりやすくするために図示したものである。

全体的には、男女共鉄棒運動、マット運動、跳び箱運動の指導において「技術を身につけてから指導する」、「技能を持たなくとも教材研究してから指導する」、「できる生徒(児童)を使って指導する」、「示範しながら指導する」という方法を取るに集中しているが、取る方法の比率には性差がみられる。たとえば、男子では鉄棒運動、マット運動、跳び箱運動の各技能内容とも「示範しながら指導する」の比率が最も高く、跳び箱運動(59.0%)、マット運動(50.8%)、鉄棒運動(34.4%)の順に顕著である。次いで「技能を身につけてか

表-3 男子の各技能別の指導方法 (%)

指導方法	内容	年令					
		全体	22~23	24~25	26~27	28~29	30~以上
		61	13	25	7	10	6
①言葉で説明して指導する	鉄棒運動	1.6	0	8.0	0	0	0
	マット運動	0	0	0	0	0	0
	跳び箱運動	1.6	0	4.0	0	0	0
②技能を身につけてから指導する	鉄棒運動	23.0	15.4	24.0	14.3	30.0	33.3
	マット運動	23.0	7.7	32.0	0	40.0	16.7
	跳び箱運動	14.8	7.7	20.0	0	10.0	33.3
③技能をもたなくとも教材研究してから指導する	鉄棒運動	9.8	7.7	16.0	14.3	0	16.7
	マット運動	9.8	7.7	20.0	0	0	0
	跳び箱運動	6.6	0	16.0	0	0	0
④できる生徒(児童)を使う	鉄棒運動	27.9	15.4	20.0	28.6	50.0	16.7
	マット運動	16.4	7.7	12.0	28.6	20.0	33.3
	跳び箱運動	16.4	23.1	8.0	28.6	20.0	16.7
⑤示範しながら指導する	鉄棒運動	34.4	53.8	32.0	42.8	20.0	16.7
	マット運動	50.8	76.9	36.0	71.4	40.0	33.3
	跳び箱運動	59.0	69.2	48.0	71.4	70.0	50.0
⑥副読本(教科書)を用いて指導する	鉄棒運動	1.6	7.7	0	0	0	0
	マット運動	0	0	0	0	0	0
	跳び箱運動	0	0	0	0	0	0
⑦視聴覚などの教材を用いて指導する	鉄棒運動	1.6	0	0	0	0	16.7
	マット運動	1.6	0	0	0	0	16.7
	跳び箱運動	1.6	0	4.0	0	0	0
⑧できる先生に指導をお願いする	鉄棒運動	0	0	0	0	0	0
	マット運動	0	0	0	0	0	0
	跳び箱運動	0	0	0	0	0	0
⑨まったく指導しない	鉄棒運動	0	0	0	0	0	0
	マット運動	0	0	0	0	0	0
	跳び箱運動	0	0	0	0	0	0

※ 鉄棒運動：さか上がり一腕立て前転・前回り
 マット運動：前転・開脚前転・前転
 跳び箱運動：腕立て開脚跳び

ら指導する」、「できる生徒(児童)を使って指導する」の比率が高いが、技能の内容によっては後者の2つの方法が入れ変わり、比率にも差異がみられる。女子では、鉄棒運動、マット運動、跳び箱運動の各技能内容とも男子とは異なり、指導の方法は「できる生徒(児童)を使って指導する」の比率が最も高く、鉄棒運動(42.9%)に顕著である。次いで、「示範しながら指導する」、「技能を身につけてから指導する」の比率が高いが、技能の内容によっては後者の2つの方法が男子同様入れ変わり、比率にも差異がみられる。このように、男子では「示範しながら指導する」という積極的な傾向であるのに対して、女子では「できる生徒(児童)を使って指導する」という消極的な傾向が窮え、授業展開には性差がみられた。

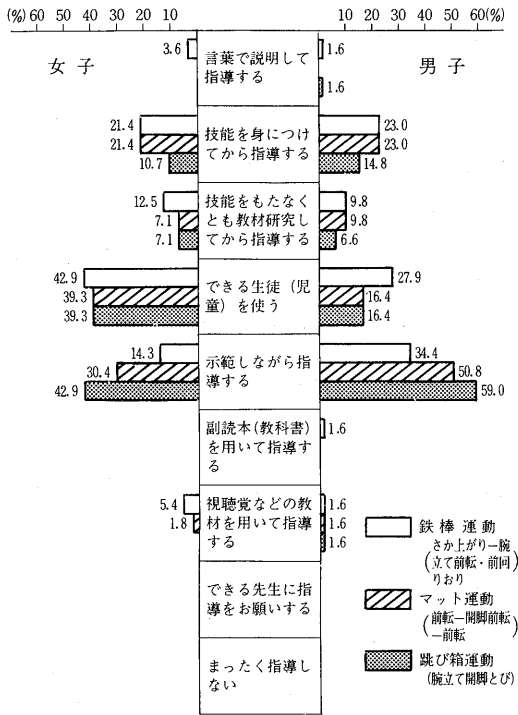
また、指導方法は助教諭の技能の習得状況によっても左右されるように思われる。たと

表-4 女子の各技能別の指導方法 (%)

指導方法	内容	年令						
		全体	20~21	22~23	24~25	26~27	28~29	30~以上
		56	3	19	20	7	2	5
①言葉で説明して指導する	鉄棒運動	3.6	0	15.3	0	0	0	20.0
	マット運動	0	0	0	0	0	0	0
	跳び箱運動	0	0	0	0	0	0	0
②技能を身につけてから指導する	鉄棒運動	21.4	66.7	26.3	20.0	0	0	20.0
	マット運動	21.4	66.7	10.5	25.0	28.6	0	20.0
	跳び箱運動	10.7	66.7	0	15.0	0	0	20.0
③技能をもたなくとも教材研究してから指導する	鉄棒運動	12.5	0	5.3	15.0	0	100.0	20.0
	マット運動	7.1	0	0	5.0	14.3	100.0	0
	跳び箱運動	7.1	0	10.5	10.0	0	0	0
④できる生徒(児童)を使う	鉄棒運動	42.9	33.3	47.4	45.0	42.9	0	40.0
	マット運動	39.3	33.3	47.4	35.0	57.1	0	20.0
	跳び箱運動	39.3	0	57.9	25.0	28.6	100.0	40.0
⑤示範しながら指導する	鉄棒運動	14.3	0	15.8	5.0	57.1	0	0
	マット運動	30.4	0	42.1	30.0	0	0	60.0
	跳び箱運動	42.9	33.3	31.6	50.0	71.4	0	40.0
⑥副読本(教科書)を用いて指導する	鉄棒運動	0	0	0	0	0	0	0
	マット運動	0	0	0	0	0	0	0
	跳び箱運動	0	0	0	0	0	0	0
⑦視聴覚などの教材を用いて指導する	鉄棒運動	5.4	0	0	15.0	0	0	0
	マット運動	1.8	0	0	5.0	0	0	0
	跳び箱運動	0	0	0	0	0	0	0
⑧できる先生に指導をお願いする	鉄棒運動	0	0	0	0	0	0	0
	マット運動	0	0	0	0	0	0	0
	跳び箱運動	0	0	0	0	0	0	0
⑨まったく指導しない	鉄棒運動	0	0	0	0	0	0	0
	マット運動	0	0	0	0	0	0	0
	跳び箱運動	0	0	0	0	0	0	0

※ 鉄棒運動：さか上がり一腕立て前転・前回り
 マット運動：前転・開脚前転・前転
 跳び箱運動：腕立て開脚跳び

図一七 男子および女子の各技能別の指導方法



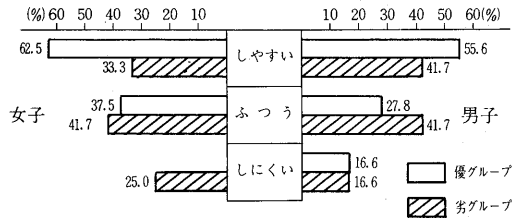
えば、表一1および表一2の各技能の習得率および未習得率から各技能の習得状況を見ると、男女共跳び箱運動、マット運動、鉄棒運動の順に技能が高いといえるが、この技能の内容順に「示範しながら指導する」の比率が高い。つまり、技能に対する自信の有無が指導方法の積極性・消極性に関係のあることが認められた。このことは、おそらく、後述する技能の有無からみた意識において一層明確になるものと思われる。

(3) 器械運動の技能の有無からみた意識

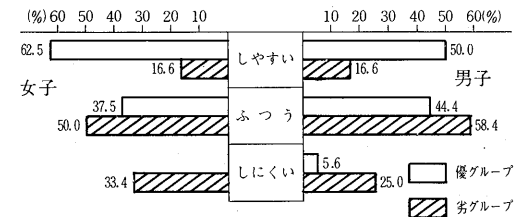
1) 総体的技能の有無からみた意識

第2報に引き続き、「助教諭の各運動領域の技能の有無が当該運動領域の指導上、どのような意識となってあらわれているか」を考察するために、器械運動の技能のある者・ない者を抽出しその意識を調査分析した。器械運動の各技能に「できる」を取った者を技能のあるグループ（以降「優グループ」とする）、

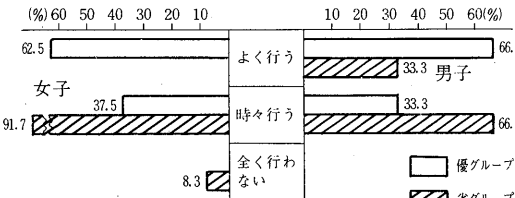
図一八 優劣グループからみた体育の指導の難易性



図一九 優劣グループからみた器械運動の難易性



図一〇 優劣グループからみた器械運動の授業中の示範



また鉄棒運動、マット運動、跳び箱運動のうち2つ以上の技能に「できない」を取った者を技能のないグループ（以降「劣グループ」とする）とした。

図一9は器械運動の指導の難易性についての結果である。

第2報と同様、優劣グループに顕著な意識の差がみられ、優グループに比べ劣グループの男女は器械運動の指導に相当苦慮している。すなわち、指導「しやすい」は優グループの男子50.0%、女子62.5%に対し劣グループの男女共16.6%であり、「しにくい」は優グループの男子5.6%、女子0%に対し劣グループの男子25.0%、女子33.4%であり、技能の有無がかなりの意識の差となってあらわれている。

図-10は器械運動の授業中の示範の程度についての結果である。

教員自身による示範は、ある程度の行動の積極性をみるうえで参考になると思われるが、示範を「よく行う」は優グループの男女共60%以上の高い比率を示しているのに対して、劣グループの男子33.3%、女子0%と低い比率を示し、優グループは積極的傾向に対し劣グループは消極的傾向にある。

授業中の示範は、学習者に運動技能を習得させるとき、話だけで済ませるより動きを視覚に訴えて直観化できること、また、具体的内容を提示することにより、運動の要領・留意点などを正しく認識させ、学習者に個人や集団の目標を確認させることができるなど、学習効果を高める重要な要因となると思われる。示範は教員による示範のほか、児童に行わせる、視聴覚教材の利用など考えられるが、本研究の対象者である助教諭の年齢構成が若いことを考えると、基礎的技能を習得し積極的な授業展開を行うことが望まれる。

2) 内容別技能の有無からみた意識

さきに、器械運動の技能の有無からみた意識では、器械運動の技能を総体的に促えて考察したが、ここではさらに一歩進めて、器械運動の鉄棒運動、マット運動、跳び箱運動の内容別技能の有無と当該内容の指導に対する意識の関係について考察したい。したがって、技能のある者・ない者は内容別に抽出し、前者を優グループ、後者を劣グループとし、優グループは各内容ごとに「できる」を取った者、劣グループは「できない」を取った者とした。この調査では、男子はある内容によっては対象者が少数なうえ、さらに無回答者がいたため、優劣グループによる意識の差異を比較できない場合もあるので、継続研究し、今後の課題としていきたい。

図-11は器械運動の技能内容別指導の難易性についての結果である。

全体的傾向では、技能内容別指導のしやすい

さ・しにくさの比率を考慮すれば、男子の跳び箱運動を除いた他の技能内容において、男女共優グループよりも劣グループに指導を苦慮している様子が窮え、男子よりも女子の劣グループにその傾向が強くみられた。すなわち、女子では各技能内容とも指導「しやすい」の比率は優グループよりも劣グループの比率が低く、「しにくい」の比率は優グループでは鉄棒運動、マット運動とも0%、跳び箱運動7.1%に対し、劣グループでは鉄棒運動24.1%、マット運動30.8%、跳び箱運動42.9%と優グループの比率を大きくかわり、技能の有無がかなりの意識の差となっておりあらわれている。

図-11 優劣グループからみた器械運動の技能内容別指導の難易性

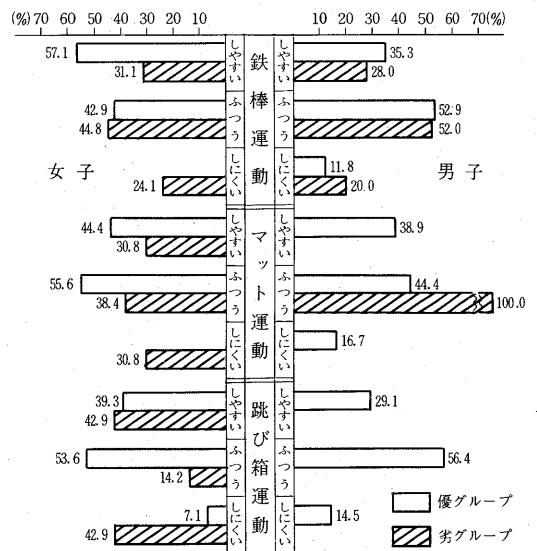


図-12は器械運動の技能内容別の示範の程度についての結果である。

示範を「よく行う」は、男子では鉄棒運動を除いて、女子ではすべての技能内容において、優グループが劣グループよりも顕著に高い比率を示している。示範を「行わない」は、男子では優劣グループの差異はみられないが、女子ではマット運動を除いては優グループよりも劣グループが高い比率を示し、跳び箱運

図-12 優劣グループからみた器械運動の技能内容別の示範

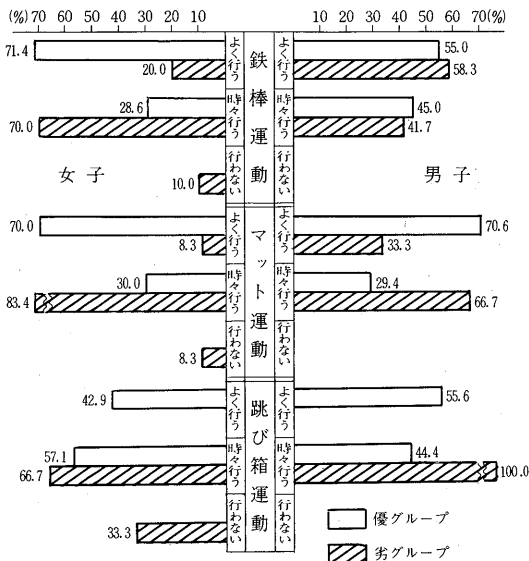
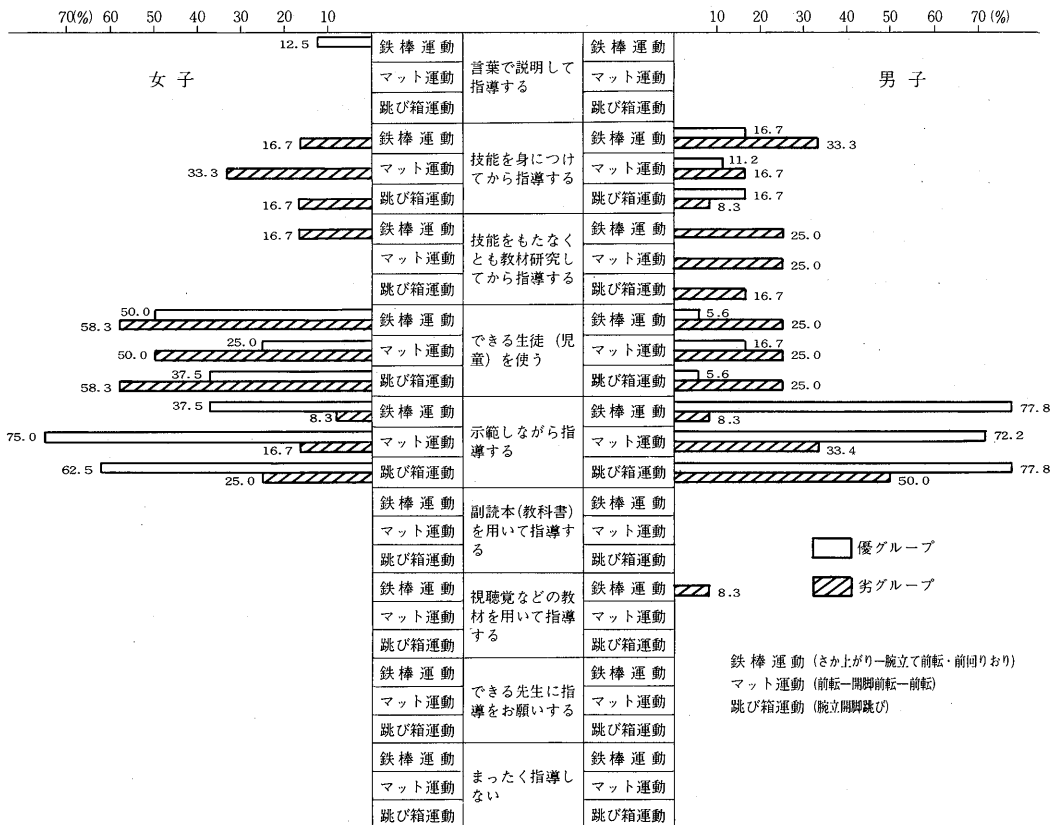


図-13 優劣グループからみた器械運動の技能内容別の指導方法



動では3割以上にも達している。このように、優グループは積極的に示範を行う傾向にあるのに対して、劣グループは消極的傾向であり、女子にその傾向が強くみられた。

体育の指導では、ある程度の技能をもち、示範することが前述したような学習効果を高めるうえで重要になると思われるが、ある特定の技能を示した場合（ここでは小学校5年生程度の技能内容である）、技能の有無によりどのような取り組み方をするのかを、主として示範の行い方を含んだ質問から優劣グループによる意識の差をみた。

図-13は技能内容別の指導方法についての結果である。

男子では、優グループは鉄棒運動、マット運動、跳び箱運動とも「示範しながら指導する」が圧倒的に多く、72.2~77.8%の高率を

示し、他の方法を取るは少ないが、劣グループでは「示範しながら指導する」は優グループよりも顕著に低い比率である。すなわち鉄棒運動では「技能を身につけてから指導する」が一番多く、「技能をもたなくとも教材研究してから指導する」、「できる生徒（児童）を使う」が次いで多いが、この三方法をほぼ同程度に取るとしている。マット運動では「示範しながら指導する」が一番多く、次いで「技能をもたなくとも教材研究してから指導する」、「できる生徒（児童）を使う」であるが、鉄棒運動同様上記の三方法を同程度に取るとしている。跳び箱運動では、優グループと同様「示範しながら指導する」が他の方法よりも圧倒的に多いが、優グループの比率と比べれば低率となっている。女子では、優グループは鉄棒運動を除いては男子の優グループ同様「示範しながら指導する」が圧倒的に多く、劣グループよりも顕著に高率を示している。劣グループではすべての技能内容に「できる生徒（児童）を使う」が圧倒的に多く、男子の劣グループよりもさらに消極的傾向が窮える。このように、優グループ、つまり技能のある者は自身で示範しながら指導するという授業展開であるのに対して、劣グループ、つまり技能のない者は生徒（児童）を使って指導するという授業展開であり、特に女子にその傾向がみられた。

生徒（児童）にやらせながらの示範は、それを見る他の学習者に意欲をもたらす一面もあるが、ややもすると説明がくどく、言葉で理解させようとする傾向に陥りやすいので、授業中の示範は適宜教員自身による示範も挿入し、適度に教員の指導性を強めた活気ある授業展開にすることも望まれる。

本研究の対象者である助教諭は教職経験1～2年未満の年齢構成も25才までが6割を占める若い教員によって構成されているにも拘らず、「生徒（児童）を使って」示範を行う者も多く、消極的な意識が窮えるが、この点が

我々にとって気がかりなところである。

この調査で「技能を身につけてから指導する」は裏をかえせば、現時点では指導しないがいずれ指導の機会をもつという意味にも捉えることができるので、場合によっては単元計画に組まれていても指導しないで済ませ、他の運動技能の内容や他領域に振りかえることもあり得るであろう。また、現時点では自身による示範や指導は困難であるが、担当学年がかわりこれらの技能内容を取り扱うまでに必要な技能を習得したり、指導不足を補っておけばよいという考え方も想定できよう。ここで問題になることは、多忙な生活を送る現職の助教諭が「いつ」、「どこで」、「できない技能を」あるいは「不完全な技能を」習得していくのか、また、新学習指導要領実施に伴い各運動領域の内容の取り扱いには教員の裁量により弾力的な取り扱いが可能であるため、教職経験の浅い指導力の不足した教員にとっては技能に対する自信のなさから、できない技能・不完全な技能の指導を回避することもあり得るのではないかと思われるので、今後、その面についての意識の分析をさらに進めていきたい。

2. 表現運動（ダンス）に対する意識とその指導の実態

小学校助教諭の体力・技能と教科体育に対する意識およびその指導の実態などについて、過去5年間にわたって調査分析してきたが、これらの調査や他の調査からも指摘されるように、ダンスは教科体育の運動領域の中でも、特に指導しにくい領域である。

最近では、教員を対象とした研修会・講習会などの開催により、教員のダンス指導への苦慮は減少しつつあるように思われるが、今なお現場の教員からは敬遠される傾向にあるように思われる。

学習指導要領の改訂に伴い、「ダンス」が「表現運動」と改称され、その内容も吟味がなされ、自己の感じを表現することが一層重

視されることになった。つまり、これまでの「フォークダンス」、「表現」の二本柱の内容から「表現」に重点が置かれ、「フォークダンス」は副次的な取り扱いとなった。

第4報では、このような新指導要領を現職にある教員がどのような受けとめ方をしているのか、また、助教諭の指導に対する意識や指導の実態はいかなるものであるのかなど、これらの問題点について追求を試みたい。

(1) 新学習指導要領に対する意識

表-5は、学習指導要領改訂に伴って「ダンス」の領域が「表現運動」と改称されたことを助教諭がどの程度知っているかについて調査した結果である。

表-5 「表現運動」の改称 (%)

項目	性別	全 体	男 子	女 子
知 っ て い る		73.3	71.9	75.0
知 ら な い		26.7	28.1	25.0

「知っている」は男女共70%以上であるが、「知らない」は男子28.1%、女子25.0%にも達し、かなり高い比率を示した。本調査の対象者は教職経験年数1年未満の経験の浅い教員(図-4参照)によって占められる比率が高いとはいえ、新学習指導要領への移行期間や既に新学習指導要領が実施され、それを基に指導がなされている現状を考慮すれば、助教諭の認識不足は否定できない事実であるといえる。

前述したように、学習指導要領改訂に伴い、これまでの内容の一つであった「表現」が一層重視されることになるが、このことに対して助教諭がどのような受けとめ方をしているかは、表-6、および表-7の結果のとおりである。表-6は表現重視に対する意識、表-7は表現を重視することの指導面への影響についての結果である。

本研究者による小学校教諭を対象とする調査、ダンス(表現運動)指導の実態とその意識についての調査では、①ダンスは教諭の男

表-6 表現重視の指導に対する意識 (%)

項目	性別	全 体	男 子	女 子
大 い に 賛 成		14.5	13.2	16.1
ま あ 賛 成		55.5	52.6	59.1
ど ち ら で も な い		20.3	26.3	12.9
や や 反 対		9.2	7.9	10.8
ま っ た く 反 対		0.5	0	1.1

表-7 表現重視の指導面への影響 (%)

項目	性別	全 体	男 子	女 子
これまでよりも指導し やすい		9.3	8.9	9.8
これまでと変わらない		14.2	15.2	13.0
これまでよりも指導し にくい		46.6	36.6	58.7
わ か ら な い		29.9	39.3	18.5

女共指導に相当苦慮する領域であり、男子にその傾向が強くみられたこと ②ダンスの内容のうち、フォークダンスよりも特に表現に指導の苦慮が顕著であり、それゆえに他領域・他教科への振り替えが顕著であったことなどの結果を得ている。

これらの結果や新学習指導要領に伴い表現に一層の重点を置いた指導がなされなければならないことを考慮すると、助教諭特に男子教員は、表現重視に対する指導に否定的な考えをもち、指導面への影響もこれまで以上に指導に苦慮するであろうとの仮説を立て、表-6および表-7の調査を実施したが、その結果においては我々と助教諭の意識とにギャップがみられた。すなわち、表-6の表現重視の指導に対しては、「大いに賛成」、「まあ賛成」の肯定的な考えは、男女共高率を示し男子65%、女子75%以上であり、「やや反対」、「まったく反対」の否定的な考えは男子7.9%、女子11.9%と全体からみれば1割にも満たない低率であり、ここにギャップがみられた。また、表-7の表現重視の指導面への影響は、「これまでよりも指導しやすい」、「変わらない」は男女共ほぼ同率であるが、「これまでよりも指導しにくい」は男子よりも女子にその比率が高く、男子36.6%に対し女子

58.7%と、男子以上に女子の指導への苦慮ぶりが浮き彫りにされ、この点においてもギャップがみられた。しかし、ここで問題になることは、特に男子の「わからない」の比率が高いこと、つまり、約40%の回答を得たことであるが、男子のダンスの運動経験や指導経験（表-8参照）が浅いことによるダンスに対する認識不足・理解不足などのために、今後の指導への影響を掴み得ないことがこの結果につながったものと思われる。

(2) 表現運動（ダンス）の指導の実態

1) 指導の有無

表-8は、表現運動（ダンス）指導の有無についての結果である。

表-8 表現運動（ダンス）の指導の有無 (%)

項目	性別		
	全 体	男 子	女 子
あ る	40.8	32.7	50.5
な い	59.2	67.3	49.5

全体的にみると、指導「したことがある」は40.8%であり、「したことがない」は59.2%である。男女別では、指導「したことがある」は男子32.7%に対し女子50.5%、「したことがない」は男子58.9%に対し女子49.5%と男子の方が指導をより敬遠する傾向にあることが認められた。

男女共指導を敬遠する比率が高いのは、本調査の対象者に教職経験1年未満の者が多いこと、そして調査期間が一学期終了時の時期尚早であったことの影響にもよると思われるので、さらに一步進めて、昨年度の体育指導におけるダンスの指導の有無についても調査した。表-9がその結果である。

表-9 昨年度のダンスの指導の有無 (%)

項目	性別		
	全 体	男 子	女 子
し た	44.0	41.1	47.5
し な い	56.0	58.9	52.5

指導の有無の比率は、さきの結果とほぼ同程度であり、実に男子の約6割、女子の約5割が指導をしなかったとしている。

2) 授業時数

表-9の指導した者について、さらに昨年度の総授業時数、内容別授業時数についても調査し、表-10の結果を得た。

領域別の授業時数は、学校の実情、学年による差異などを考慮して配分するものであるが、小学校指導書体育編に示された領域別授業時数と比較すると、助教諭の指導した授業時数はこれよりもかなり下回る結果であった。すなわち、表-10からほぼ標準授業時数に匹敵する授業時数「15~19時間」は全体の6.1%、そして標準授業時数により近い「10~14時間」、「20時間以上」は両方含めても約30%と低率であるのに対し、標準授業時数以下は全体の60%以上にも達した。ダンスの総授業時数における性差はみられなかった。また、指導内容別授業時数では、フォークダンスは「5~9時間」の43.1%、次いで「5時間未満」の37.5%が多く、ほぼこの時間配分に集中している。表現は「5時間未満」の57.5%が特に多く、フォークダンスよりも授業時数が少ないことが認められた。ダンスの内容別授業時数における性差はほとんどみられなかった。

表-10 昨年度のダンス指導の授業時数

内容 授業時数	ダ ン ス			フ ォ ー ク ダ ン ス			表 現		
	性別			性別			性別		
	全 体	男 子	女 子	全 体	男 子	女 子	全 体	男 子	女 子
~ 5 時間 未 満	28.8	28.9	28.6	37.3	35.5	40.4	57.5	58.3	56.5
5 ~ 9 時 間	33.3	34.2	32.1	43.1	45.2	40.0	25.5	25.0	26.1
10 ~ 14 時 間	28.8	28.9	28.6	15.7	16.1	15.0	12.8	12.5	13.0
15 ~ 19 時 間	6.1	5.3	7.1	3.9	3.2	5.0	2.1	0	4.3
20 時 間 以 上	3.0	2.6	3.6	0	0	0	2.1	4.2	0

3) 授業の振り替えの有無

表-11は表現運動(ダンス)の授業の他教科・他領域への振り替えの有無についての結果である。

「よくある」、「時々ある」を含めると約70%にも達し、かなり多く行われており、女子よりも男子にその傾向がみられた。振り替えの理由としては、ここには示していないが、男女共「指導がしにくい」、「児童がはずかしがったり、嫌やがたりする」など理由をあげ苦手意識と強く結びついている。

表-11 表現運動(ダンス)の授業の他教科・他領域への振り替え (%)

項目	性別	全 体	男 子	女 子
よ く あ る		19.4	26.8	9.7
時 々 あ る		49.3	46.3	53.2
な い		31.3	26.8	37.1

このように、表現運動(ダンス)の授業は振り替えられることが多く、指導の苦手意識からくる場合が多いが、指導力をつける方策としては表現運動(ダンス)の研究会・講習会などへの参加や先輩の教員に聞くなどの方法をよく利用している。

4) 取り扱い内容

表現運動の取り扱い内容では、その題材やフォークダンスの曲名についても調査した。しかし、今回の調査が一学期終了時点の時期尚早であったことが大きく影響し、今年度指導の表現運動の題材およびフォークダンスの曲名について、詳細に調査分析することができなかった。したがって、これらの問題点については追跡調査を行い、今後の研究課題としていきたい。

新学習指導要領によれば「表現運動の内容については、フォークダンスを含めて指導することができること」と示され、フォークダンスは副次的な取り扱いとなり、取り扱う曲名については指導者である教員にすべてが委ねられた。本調査の助教諭は、選曲にあっ

ては「学年にふさわしい適当な曲を選ぶ」とする者が圧倒的に多く、旧の学習指導書体育編などの文献を参考にすることが少ないが、助教諭はいったい何をよりどころに選曲するのか、この問題点について今後とも着目していきたい。

(3) 表現運動(ダンス)の指導に対する意識

1) 指導の難易性

表現運動(ダンス)の指導の難易性については、前述したように指導しにくい領域であるが、内容によっては指導の難易性は異なると思われるので、ここでは、内容別指導の難易性とその理由について詳細に調査分析した。

表-12は表現の指導の難易性、表-13はフォークダンスの指導の難易性についての結果である。

表-12 表現の指導の難易性 (%)

項目	性別	全 体	男 子	女 子
し や す い		9.9	8.8	11.2
ふ つ う		28.7	22.0	36.3
し に く い		61.4	69.2	52.5

表-13 フォークダンスの指導の難易性 (%)

項目	性別	全 体	男 子	女 子
し や す い		31.4	25.0	38.8
ふ つ う		44.8	40.2	50.0
し に く い		23.8	34.8	11.2

表現の指導の難易性では、全体的にみて、指導「しやすい」は9.9%と低率を示しているのに対して、指導「しにくい」は61.4%と高率であり、助教諭は表現運動の指導に相当苦慮していることが窮えた。男女別では、男子69.2%に対して女子は52.5%が指導「しにくい」とし、男女共相当指導を苦慮している。

フォークダンスの指導の難易性では、全体的にみて、指導「しやすい」は31.4%、「ふつう」は44.8%、「しにくい」は23.8%であり、助教諭にとって表現に比べれば、フォー

クダンスはさほど指導しにくい領域ではないように思われる。男女別では、指導「しやすい」は男子25.0%に対し女子38.8%、「しにくい」は男子34.8%に対し女子11.2%と男子よりも女子に指導しやすいとする者が多い。

以上の結果から、男女共フォークダンスよりも表現に相当苦慮している様子が窺えた。

また新学習指導要領実施に伴い、表現が一層重視され、フォークダンスが副次的な取り扱いとなるが、このことを考慮すると、表現運動（ダンス）の領域は今後一層、指導に対する苦慮が予想される。

2) 内容別の指導しやすい理由・しにくい理由

表-14は表現およびフォークダンスの指導しやすい理由について、表-15は表現およびフォークダンスの指導しにくい理由についての結果である。

〔表現〕 全体的にみて、指導しやすい理由としては「児童の変身したいという欲求や何かを表わしたいという欲求を満すことができ、児童が楽しんで行う」、次いで「音楽・

表-14 内容別指導のしやすい理由

内容	項目	性別 (%)		
		全体	男子	女子
表	1. 指導方法をよく知っている	17.6	25.0	11.1
	2. 運動技能に自信がある	5.9	0	11.1
	3. 体力を要さない	0	0	0
	4. 危険が伴わない	0	0	0
現	5. 児童の変身したいという欲求や何かを表わしたいという欲求をみたすことができ、児童が楽しんで行う	82.4	87.5	77.8
	6. 音楽・楽器などを利用でき、児童に興味・関心をもたせやすい	70.6	62.5	77.8
	7. その他	5.9	12.5	0
フ ォ ー ク ダ ン ス	1. 指導方法をよく知っている	14.8	13.0	16.1
	2. ステップや組み方、廻り方などよく知っている	18.5	8.7	25.8
	3. 運動技能に自信がある	3.7	8.7	0
	4. 体力を要さない	0	0	0
	5. 指導が割と簡単であり、手軽に行える	51.9	56.5	48.4
	6. 音楽を利用するので、児童に興味・関心をもたせやすく、また児童が楽しんで行う	88.9	91.3	87.1
	7. 危険が伴わない	1.9	4.3	0
	8. その他	0	0	0

(重答)

表-15 内容別指導のしにくい理由 (%)

内容	項目	性別 (%)		
		全体	男子	女子
表	1. 指導方法（表現における動きの引き出し方、表わし方、まとめ方、観賞の仕方など）わからない	59.0	66.7	47.6
	2. 運動技能に自信がない	6.7	6.3	7.1
	3. ダンスの時間・空間的要因、集団の力性、美的法則などの知識が不足している	33.3	34.9	31.0
	4. 男女差、個人差を踏えた指導がむづかしい	10.5	7.9	14.3
	5. 児童に興味・関心をもたせるのがむづかしい	82.4	87.5	77.8
	6. 児童がはずかしくったり、いやがったりする	70.6	62.5	77.8
	7. 指導内容が平易でなく、把握しにくい	5.9	12.5	0
	8. 評価がむづかしい	0	0	0
	9. その他	0	0	0
フ ォ ー ク ダ ン ス	1. 指導方法がわからない	53.7	59.4	33.3
	2. 運動技能に自信がない	14.6	15.6	11.1
	3. ステップや組み方、廻り方などよくわからない	58.5	59.4	55.6
	4. 児童に興味・関心をもたせるのがむづかしい	17.1	18.8	11.1
	5. 児童がはずかしくったり、いやがったりする	24.4	18.8	44.4
	6. その他	4.9	3.1	11.1

(重答)

楽器などを利用でき、児童に興味・関心をもたせやすい」を特に多く回答している。指導しにくい理由としては「指導方法（動きの引き出し方、まとめ方、観賞のしかたなど）がわからない」を特に多く回答し、次いで「児童に興味・関心をもたせるのがむづかしい」、 「ダンスの時間・空間的要因、集団の力性、美的法則などの知識が不足している」を回答している。男女別では、男女共指導しやすい理由・しにくい理由は同じ項目を多く回答している。

〔フォークダンス〕 全体的にみて、指導しやすい理由としては「音楽を利用するので、児童に興味・関心をもたせやすく、また児童が楽しんで行う」が特に多く、次いで「指導が割と簡単であり、手軽に行える」を回答している。指導しにくい理由としては「ステップや組み方、廻り方などよくわからない」、 「指導方法がわからない」を特に多く回答している。男女別では、男女共指導しやすい理由・しにくい理由は同じ項目を多く回答して

いる。

以上のような結果から、表現運動（ダンス）の内容別指導のしやすい理由・しにくい理由では、内容の各々の特性と深く結びついていることが認められた。また、各内容とも基礎的知識の不足や指導方法に関する研究不足が指導のしにくさに関係のあることが認められた。

3) 授業運営について

表一16は表現運動の授業運営、特に内容別指導の重点の置き方を取り上げ、助教諭が指導にあたって、主にどの内容に重点を置いて指導しているか調査した結果である。

表一16 指導の重点の置き方 (%)

項目	性別		
	全 体	男 子	女 子
フォークダンスに重点	43.9	52.9	34.4
表 現 に 重 点	40.9	32.4	50.0
どちらも同じくらい	15.2	14.7	15.6

指導の重点の置き方では、恐らく表現より容易に指導できると思われるフォークダンスに片寄るのではないかと推察していたが、男子は「フォークダンス」に、女子は「表現」に重点を置く者が多くみられた。女子の「表現」に重点を置く者が多いことは、新学習指導要領実施に伴う「表現課題に重点を置く」とする趣旨を汲んだあらわれとみることができ、表一10の内容別授業時数との関係を考慮すれば必ずしもそうではないことが想定できる。すなわち、女子は「表現重視」の意識であるにも拘らず、実際面の指導では、表現よりもフォークダンスの授業時数の方が多くなり、意識と実態との間にギャップが生じているからである。このギャップの所在はいかなる点にあるのかについては今後の研究課題としていきたい。

要約および今後の研究課題

本研究第4報においては、小学校助教諭の器械運動の技能とその指導に対する意識、表

現運動（ダンス）に対する意識とその指導の実態について調査分析した結果、次のような結果と結論を得た。

1. 器械運動の技能について

全体的にみて、女子の技能の低いことが認められたが、鉄棒運動およびマット運動の連続わざでは男女共技能未習得者が多く、連続わざの技能が顕著に低いことが認められた。また、鉄棒運動およびマット運動において我々の評価と助教諭の自己評価とに大きなギャップがみられた。

2. 器械運動の技能と指導に対する意識の関係

第1報および第2報同様、技能の有無が意識の高さ・低さ、行動面の積極性・消極性に関係のあることが認められた。

3. 表現運動（ダンス）の指導の実態

助教諭の大半は、新学習指導要領に伴う表現重視の趣旨に肯定的な考えをもつが、指導面への影響ではより指導に苦慮するとしている。

指導の難易性では、フォークダンスに比べ表現により苦慮しているが、基礎的知識の不足や指導方法に関する研究不足がそれと深く関係していることが認められた。

4. 表現運動（ダンス）に対する意識

指導に対する苦慮から、他教科・他領域への振り替えが顕著であり、助教諭の男女共指導を敬遠する傾向の強いことが認められた。

授業時数は文部省学習指導書体育編に示された領域別授業時数（例）をかなり下回り、内容別授業時数では表現よりもフォークダンスの方が多いことが認められた。

上記の結果から、初等教員養成課程の教材研究などにおいては、器械運動では、女子教員の技能の低さが意識や行動面で消極的傾向にさせやすいことを考えると、技能の習熟を中心とした指導の展開が要求される。また、表現運動（ダンス）では、領域の特性を踏えた指導方法の習熟をめざした指導の展開が要

求される。

今後の研究課題としては、今回の調査、特に表現運動（ダンス）の調査では調査期間が時期尚早であることが大きく影響して、明確な結果をだすことができず、また、より詳細に調査すべき項目もみられたので、標本を増すとともに意識調査の調査期間、質問方法なども再検討し、調査分析していきたい。

また、本研究は教職経験、取得免許、年齢などに深く関連すると思われるので、これらの追求と、さらに対象者を助教諭から現職にある小学校教諭などまで広げ、調査研究していきたい。

稿を終えるにあたり、第1報からの共同研究であった東洋大学助教授穂田清氏、明星大学野崎忠信氏および測定と結果の整理などに御協力いただいた皆様に謝意を表します。

（本研究は昭和54年度および55年度文部省科学研究費補助金により遂行したものである）

参 考 文 献

- (1) 文部省：小学校指導書体育編，東山書房，1978，5.
- (2) 前川峯雄他：小学校新学習指導要領の解説と展開体育編，教育出版，1977，8.
- (3) 前川峯雄他：改訂小学校学習指導要領の展開体育科編，明治図書刊，1977，9.
- (4) 文部省：小学校指導書体育編，東洋館出版社，1969，5.
- (5) 亥野他：小学校体育についての現職教員および教員志望者の意識と指導資質に関する研究，日本体育学会，第25回大会号。
- (6) 東京学芸大学保健体育学科調査研究委員会：小学校婦人教師の体育指導に関する調査，1975，2.
- (7) Vanniet, M : Teaching Physical Education in Secondary Schools Saunders Second Edition, 1975.
- (8) Evelynl. Schurr. : Movement Experiences for Children, 1975.
- (9) 森清他：助教諭の体力、技能と教科体育への意識，文教大学紀要第10集，1977.
- (10) 森清他：小学校助教諭の体力・技能と教科体育への意識(第2報)，文教大学紀要第11集，1978.
- (11) 森清他：小学校助教諭の体力・技能と教科体育への意識(第3報) —女子教員の取得免許別意識を中心として—，文教大学紀要第12集，1978.
- (12) 穂田清他：小学校助教諭の体力・技能と教科体育への意識(第4報) —器械運動技能の実態—，日本体育学会，第30回大会号，1979，10.
- (13) 野崎忠信他：小学校助教諭の体力・技能と教科体育への意識(第5報) —通信教育受講者の教科体育に対する意識を中心として—，日本体育学会，第31回大会号，1980，10.
- (14) 木一郎他：小学校教諭の教科体育に対する意識(I) —教諭と助教諭の意識の比較を中心として—，日本体育学会，第31回大会号，1980，10.
- (15) 梶原洋子他：小学校教諭の教科体育に対する意識(II) —ダンス指導の実態とその意識を中心として—，日本体育学会，第31回大会号，1980，10.
- (16) 矢野久英：運動への学習指導，日本体育社，1974，4.